

殺、萬人講十三會、山之上春日於社頭興行。青舛寺同斷、津幡於弘願寺興行。但札渡銀子受取渡所は、於觀音町壽經寺取嚙。御用番山城守殿御聞届。』とある如きは是である。

マンネンコホリ 萬年氷 白山嶺上に積つて多年消えることなく、凍つて水晶を欺く氷雪である。北國巡杖記には、『是を含む時は口臭を去り、眼にあつるものは眼海すこやかに精力を補ふ。されど服するときは脾の臟を破り、便道を閉ぢしむ。』といつてゐる。

マンネンジ 満念寺 羽咋郡笹波に在つて、眞宗東派に屬し、平岡山と號する。

マンネンジ 萬年寺 鳳至郡七海(今の七見)にあつて、曹洞宗に屬する。應永中日照正春の開基である。

マンブクジ 萬福寺 隆涼軒日録長祿四年八月十九日に、『加賀國萬福寺祖傑云々。御判被遊。』又文明十八年五月二十日に、『加賀國萬福寺入院圓想首座云々。』など、見えるが、今その所在を知らぬ。

マンブクジ 萬福寺 羽咋郡風無に在つて、眞宗東派に屬する。

マンブクジ 滿福寺 珠洲郡松波に在つて、曹洞宗に屬する。山號は積寶山。應安中臨濟の僧佛周之を開基したが、後一旦荒廢に歸した。隆涼軒日録文明十九年五月六日に、『自能登滿福寺狀到來。住持猷雪舟也。』又同月八日に、『滿福寺與府中相距三日程。駕船有順風則一日程之由、使僧白之。』といふものは是である。後に鳳至郡山田洞雲寺五代傳佛之を再興した。その塔所に寶光院・涌金寺があつたが今は存せぬ。能登名跡志に、『積寶山滿福寺といふ禪宗あり。大寺にて則常陸介(松波氏)位

牌木像あり。其比菩提寺の時は、地方三百石寺領ありし也。』と記する。

マンボウイン 萬寶院 金澤田町に居た當山派の山伏で、山號を寶林山といふた。

マンボウイン 萬寶院 羽咋郡矢駄に在つた當山派の山伏で、八幡大菩薩を安置して居た。後大念寺新村に移り、明治の初遷俗した。眞享二年の由來書に萬寶院が羽咋郡加茂庄村に居住することを載せるが、後世この村名はない。矢駄のことであらうか。

マンボウイン 萬法院 江沼郡鹽屋に屬する鹿島に在つた。この島にはもと天台の道場があつて鹿島明神を祀つて居たが、前田利治の時萬法院を置いて日蓮宗に改め、七面明神とした。明治の初から荒廢して、今は存せぬ。

マンボウジ 萬法寺 もと石川郡手取に在つたが、屋手取川の水難に遇うて、越前今立郡鳥羽に移つた。眞宗西派に屬して居る。

マンヨウジツヨジヨウ 萬葉事實餘情 九冊。森田平次が嘉永中に起稿し、明治三十四年七十九歳で脱稿したのを、三十七年八十二歳にして重ねて校正を遂げたもの。萬葉集中にあらはれた史實を年代の順序に従つて集録し、それに該博の考證を附してゐる。

マンヨウシユウ 萬葉集 天平廿一年は聖武天皇在位の末年である。この年四月十四日元を天平感寶と改めたが、七月二日孝謙天皇踐祚し給うたから、更に天平勝寶と名づけた。當時能登は越中に併せられ、加賀は尙越前の一部であつたが、その越中に守であつたのは大伴家持で、越前に據であつたのは大伴池主であつた。二人共に漢文に長じ和歌に巧であつたが、天平廿一年三月及び天平勝寶元年

十二月池主が家持に附つた歌は卷十八に載せられ、又天平廿一年家持の能登を巡行した際の歌は卷十七に載せられて、共に地名と地理とに關する研究問題を提供する。その他卷十八の家持が能登に眞珠を産することを述べた歌、及び卷十六の能登國歌と題した地方人の俗歌も共に注目の價値がある。



ミイケ 三池 河北郡小坂庄に屬する部落。龜尾記に、郡家をミイケと訓ずることが辨色立成に見えるから、この地は加賀郡の郡府のあつた所であらうと記する。

ミイケテンノカタナ 三池傳太の刀 前田氏の重寶で、大傳太の太刀とも稱せられ、豊臣秀吉から前田利家に興へたもの。種々の靈驗があつたといはれる。一書にいふ。三池傳太の打物は世に多いが、その内に三振の名作があつた。その一は禁裏にあつたが焼亡し、一は足利將軍より京都愛宕山へ奉納せられ、一は即ち前田氏の傳へるものであると。

ミイケリユウサンガク 三池流算學 正徳・享保の頃、大坂の人三池市兵衛算學に長じ、自ら一派を開いて三池流と稱した。市兵衛後に金澤に來り、藩士山本彦四郎にその術を授け、加賀藩の算學初めてその面目を一新するを得た。彦四郎の門下西永廣林、廣林の門下下村幹方、幹方の後系村松秀允、秀允の門下宮井安泰、安泰の門下馬淵文郎、淵川有文、文郎の子馬淵立道等相繼いでこの流を傳へた。

ミウチ 箕打 羽咋郡押水大海庄にある部落。

ミウラ 三浦 石川郡中村郷に屬する部落。石川訪古遊記に、この村に倉前・馬場跡の稱があり、寺屋敷もあると記する。

ミウラノリカタ 三浦乘賢 正徳元年前田利常に仕へ、千石を領して足輕頭に任じ、寛文十二年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

ミウラモトカタ 三浦根賢 通稱八郎左衛門・左京・采女。正徳元年父十左衛門の遺知五百石を襲ぎ、大小將・前田吉徳側小將を経て、享保九年物頭並に至り、十年二百石、元文五年百五十石を増し、同年御馬廻頭に任じ、二百五十石を加へ、延享三年御免、寶曆七年九月十四日六十四歳を以て歿した。

ミウラヤミチ みうらや路 金澤郊外鶴間谷の下なる田圃から上の坂路を眺望すると、まだ草葉の萌え出ぬ頃、その九十九折なる有様が、みうらやの假名文字の如く見えるといふので、誰となくいひ出した雅名で、後にはそれを吟じた俳句もあり、遂に鶴間谷の一名の如くになつた。但し辭末に近い頃からのことである。『ルウフルにみうらや登る人呼ばん 關更』

ミエイコウ 御影講 日蓮宗徒の開祖忌である。陰曆十月十三日に行はれた。今十月又は十一月に於いて寺院により執行の日を異にする。

ミエイドウ 御影堂 能美郡宮竹に在つた。その由來書に、元來正林寺といふたが、文明中に焼失し、その後小庵を結んで、法専坊といふ者が看司として代々居住したとある。

ミカイ 三階 鹿島郡三階良川保に屬し、